

主 論 文 要 旨

論文提出者氏名：佐々木 雅明

専攻分野：最新医学研究コース

指導教授：古茶 大樹

主論文の題目：

How Did Leo Kanner Distinguish Early Infantile Autism from Childhood Schizophrenia?

(レオ・カナーはどのようにして小児期の統合失調症から早期幼児自閉症を区別したのか?)

共著者：

Hiroki Kocha

緒言

2000 年代以降、自閉症の有病率上昇が報告される一方、自閉症という診断カテゴリーの不均質性への批判が高まっている。最近では現行の診断基準を離れて自閉症の診断方法を見直そうとする動きもあるが、この新たな主張についてはそもそも自閉症がいかにして単一の症候群として取り上げられ、他の精神障害と区別されてきたか、という歴史的議論が十分には反映されていない。そこで本論文は自閉症概念の起源の 1 つであるレオ・カナー(1894-1981)の早期幼児自閉症を取り上げる。歴史的資料の調査を通じて、カナーがいかにして小児期の精神病から早期幼児自閉症を独立させたのかを明らかにする。そこには小児期発症の統合失調症との鑑別という臨床的課題があった。重要なのは鑑別対象である統合失調症概念もまた時代とともに変遷している事実である。それがカナーの主張にどのように影響したのか、自閉症をめぐる現代の議論とどのように関連するのかについて考察を加える。

方法・対象

自閉症に関するカナー自身の論文や教科書の記述に加え、彼が引用し、早期幼児自閉症の概念形成に影響を与えた可能性のある同時代の小児期の精神障害に関する論文を網羅的に調査した。

結果

1943 年、カナーは自験例 11 例（のちに早期幼児自閉症と命名する）を報告し、症例に共通する臨床特徴のうち、とりわけ他者との「情緒的接触の障害」という精神病理を重視した。そして「情緒的接触の障害」が①生来性か、後天性か、②進行性の経過をたどるか否か、という 2 つの情報を手掛かりに自験例と小児期の統合失調症とは鑑別できると主張した。しかし、このカナーの主張は第二次世界大戦後の米国における統合失調症概念の拡大という時代背景のなかで反論をうけ、1948 年以降、カナーは逡巡しつつも早期幼児自閉症を小児期の統合失調症の下位分類の 1 つに収めてしまう。ただし、早期幼児自閉症を完全に統合失調症へ吸収させるのではなく、統合失調症のうち潜行発症で非進行性の経過をたどる一群と捉えなおした。

考察

自閉症と統合失調症との鑑別において、症状が①生来性か、後天性か、②進行性の経過をたどるか否か、という 2 点に注目したカナーの視点は同時代のドイツ精神医学の論考を思わせる。クルト・シュナイダーに代表されるハイデルベルク学派は精神障害を「疾患的でないもの」と「疾患的なもの」の 2 群に分類した。疾患的でない（生来性であり、進行性の経過を辿らない）精神障害として知的水準の低下やパーソナリティ障害などの心的資質の変異を、疾患的な（後天性であり、進行性の経過を辿る）精神障害として身体疾患を基礎として生じる精神病、および循環病や統合失調症などのいわゆる内因性精神病を対応させた。カナーは自閉症を「疾患的でないもの」、統合失調症を「疾患的なもの」と主張したかったのだろう。後年、彼は自閉症の長期予後に関する論文を出版している。同報告によれば、よい理解者にめぐまれ、こだわりなどの自閉的特性をうまく生活に利用するような待遇を受けた児童は成人後の社会適応も良好である一方、施設収容され、他の精神障害と同様の画一的な対応しか得られなかった児童らの予後は悲観的である。報告は自閉症を他の精神病とは区別して特別な理解と対応を要請するものである。近年、自閉症を医学的疾患ではなく、神経多様性（neurodiversity）の 1 つの形態として理解・受容しようという社会的要請があるが、これら現在の動きを鑑みても、自閉症を当初から「疾患的でないもの」として、精神病とは区別しようとしたカナーの先見性は際立っている。

結論

早期幼児自閉症と統合失調症の疾病分類学的関係に関するカナーの見解の変化を通時的に追跡し、時代ごとの統合失調症概念の変遷とい

う視点から説明を加えたのは、私たちが調べた限り、本論文が初めてである。カナー以降、現代まで続く自閉症と統合失調症の異同を巡る議論は、精神科診断全体に敷衍できる重要な示唆を含んでいる。同一の診断名であっても横断的症状、および縦断的経過のどちらを重視するかで概念は変化する。昨今の自閉症の流行現象に示されるように、現行の精神科診断は横断的症状を重視するあまり、他の精神障害や正常範囲の多様性との境界づけが見えにくくなっている。このような状況でカナーの縦断的経過に関する2つの鑑別的視点は今後の精神科疾病分類学の議論にとって有用であろう。「自閉症は生来的な変異なのか、それとも医学的疾患なのか」という問いに対する明確な解答は得られていない。その問題に早くから気づいていた研究者として、レオ・カナーを再評価すべきである。